

---

# 塩ラーメンと中央線の関係

シャロク坊主

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

塩ラーメンと中央線の関係

### 【Nコード】

N5595T

### 【作者名】

シャロク坊主

### 【あらすじ】

僕と一緒にラーメン屋さんに行きませんか？

美味しい塩ラーメンが食べられる店を知ってるんです。

ラーメンが好き？ それはよかった。きっと満足すること間違いありません。

ところであなた、中央線ユーザーじゃありませんよね？



学生街の古本屋めぐりに数時間を費やし、帰宅を決め込んだ頃には手提げ袋がパンパンになっていた。

重たい足取りで高田馬場の駅前に向かう。せつかく遠出をしたのだし、なじみのご飯がおかわり自由な定食屋に行こうと思ったのだ。だが、間に一人カラオケ一時間などを挟みつつようやく定食屋に辿りついたときには、店の前に学生のグループがたむろして席が空くのを待っていた。見たところ男が六人いる。愚かな連中である。あの店のテーブルは四人掛けなのだ。余った二人の男が互いを気にしてしなくてもいい会話を必要以上に繰り広げることになるのだ。四人との温度差は後々まで祟ることになるだろう。殺人事件に発展するかもしれない。

そんなことを思いながら馴染みのラーメン屋を目指して信号待ちをしていたのだが、やはり「せつかく遠出をしたのだし」というケチな根性が心身を規定する。いちおしの定食屋に入れなかったのなら、埋め合わせのそこそこまいラーメン屋よりも新規の物件を開拓してしかるべきだろう。

そんなことを考えながら歩いていくうちに、ふと小さな看板が目についた。「この奥百五十メートル」と書かれたラーメン屋の看板であった。下に貼られた塩ラーメンの画像はなかなかさっぱりしていそうで好みに合う。

一つ、ここに行ってみようと思った。

しばらくうろつる迷いつつ、ようやく塾の看板の裏に「ラーメン」と書かれたのぼりを見つけた。ずいぶんとわかりにくい場所にあるものだ。この分では客も少ないだろうと自分の土地感のなさを棚に上げてのれんをくぐる。

店内は広く、清潔感のある明るい内装で、カウンターの中には腕力のありそうな女が二人いた。メニューはカウンター席の上にあら

かじめ置いてあったので、適当に安めの塩ラーメンを選んで食べてみることにした。

待つこと五分。塩ラーメンがやってきた。箸を用いてずるずると啜る。

ちょうどその頃、信濃町で人が飛び降りた。

うん？ この味は……。

まずくはない。まずくはないのだが、なんだろう。塩ラーメンの爽やかさを「こだわりチャーシュー」の脂っぽさが損なっている。

おそらくスープだけなら逸品なのだろうが、その透明な味のせいで脂が目立って、その分まずくなってしまう。へたくそな

とんこつラーメン系列の店と同じ過ちだ。脂の処理が甘いのである。香る程度の脂なのでやけに目立つ。だが、香る程度なので食べら

れないことはない。チャーシューを早めに処理してスープをいただければ、美味しく最後まで飲めてしまう。悪くはないが、二度と来ないというレベルのラーメン屋であった。

店の雰囲気、店員の愛想共に良く、不愉快なのはただチャーシュー、まさに画竜点睛、墨の代わりに脂のしみで目を描いた、という体である。不快、というより、卑俗、なのだ。いっそのこと、塩ラーメンに肉などいらぬのではないか。あるいは鶏肉を工夫してみてもどうか。などと素人考えをぐだぐだ煮詰めつつ、東西線に乗って中野へと辿りついた。

中央線は止まっていた。人身事故があったらしい。大人しく買ったばかりの「メルカトルかく語りき」を開いて、銘探偵メルカトルのあまりの乱行にゲラゲラと笑いつつ、めっちゃ混みの運転再開直後の車両を幾つか見逃してから、どうにか許容範囲の満員電車に乗り込んだ。

ふと、デジャヴュを感じた。

この臭い、なんだろう。  
薄くほのかに脂ぎった、生ぬるい空気。

まるで、さっきの、  
食べたばかりの塩ラーメンみたいじゃないか。

いちおう、そのラーメン屋のために弁明しておく、口の中にはまだスープの香りが残っていたのだ。だから、ほんの少しの脂さえあれば、なんであろうとあの店の味にはなってしまうのである。

だが、そのときの私にとって、口の中の味は知覚できないものである。

まるで車両の中が巨大なスープ入れになったかのようなだった。  
メルカトルの残虐性が私の思考を煽りたてる。

さっきの「こだわりチャーシュー」は、人の脂肉だったのではないか？

だって、まるで味が同じじゃないか。ウミガメのスープだ。牛肉ではなく、私は人肉を喰わされていたのだ。

では、新鮮な人肉を何処から仕入れてくるのだろうか。  
それは例えば、ついさっき自殺した男の破片を

無論これは妄想であり、発想した直後には否定されるべきものである。

いや、肉片はバケツにかき集められ、残らず遺体として処理されるはずだ。

職員が遺体の一部を飲食店に横流ししている、などと考えるのは、あまりにも社会的な妥当性に欠けている。

少しばかりの無念と共に、私の妄想は私の中で内破した。

だが、それでも車両は、塩ラーメンのままだった。互いに交換しあう吐息。かけあう体重。ほどよい熱。

いつもならうんざりする周りの人間の全てに、妙な安堵感を覚えてしまっていた。

そうだ、牛が喰えるのなら、人だって喰えるじゃないか。

妄想は飛躍する。

いざとなったら食料は山ほどある。

これ、みんな、スープに浸せば食べられるんだ。

いつしか私は、本を読むのをやめて、ねっとりとかき混ぜられ、駅に着くたびガラを替えられる、手の込んだスープのとりこになっていた。いかにもはちきれそうな、健康な太り方をした若いサラリーマンの耳たぶ。目の前の中年女性の少し薄くなった頭皮。いつもなら見たくもないぶつぶつとしたおっさんの首のたるみ。何もかもが、違って見える。

斜め前の小柄な初老のサラリーマンが、原子力発電の仕組みについての本を読んでいるのがひととき滑稽だった。このスープは、新たな不安も抱え込んだのだ。我々自身の放射線汚染のメタファーなのだ。電車が揺れる。私は、彼の背中に、なるだけ体重をかけないように、手を突くしかなかった。

いいじゃないか。これで。

ここには全てが足りている。材料も、味も、客も。

あとは 食べるだけだ。

降車駅。

冷たい夜の空気が、スープの後味を霧散させた。

冷やし水を無理やり含まされた私は、車両の中を未練がましく見つめながら、こんなことを考えた。

一人の命を使っても、せいぜい満員電車を悪化させるぐらいのことしかできないと思っていたが。

存外、うまいスープも作れるじゃないか、と。

また、自動ドアが開く。

二本の箸が突っ込まれ、塩ラーメンがかき混ぜられる。

今度友人たちを誘って、もう一度あの店に行こう。

もちろん中央線ユーザーは誘わない。もっと空いた車両に乗った、脂のえぐみ知らない無垢な彼らはきつところ言つてあるづ。

「美味しいね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5595t/>

---

塩ラーメンと中央線の関係

2011年9月27日16時21分発行